

千曲川の水害と大学生の防災意識から考える防災マネジメント

令和 2 年 2 月 増田 寛太

要旨

目的

令和元年 10 月 12 日から 13 日にかけて日本列島を襲った超大型の台風 19 号は、全国各地の河川に甚大な被害を及ぼした。その中の一つである千曲川では以前から災害が多発しており、決して災害対策が万全であるとは言えない。この研究では、千曲川の氾濫データと人々の災害に対する防災意識の両方の観点から改善点などを考察し、少しでも千曲川をはじめとする河川の災害被害を減らすことを目的とする。

方法

令和元年台風 19 号による千曲川の被害箇所から、堤防の弱い地点をまとめる。さらに、信州大学の学生を対象に防災意識に関するアンケートを実施し、その結果から災害時にどのような行動が有効であるかソフト対策面での改善が必要かどうかを考察する。これらの点を踏まえた上で、次にこのようなことが発生したときにどのような行動を起こせばいいかを提案する。

結論

台風 19 号による被害や、アンケートを調査した結果、ハード対策面では、狭窄部、湾曲部、河川合流部などの形状を持った部分が全体的に災害に対して弱く、河道掘削、堤防の補強等の対策工事を行う必要があると感じた。また、ソフト対策面では人々の危機感や災害への備えが不足しており、意識改革や SNS による正しい情報共有が必要であると感じた。本来、ハード対策を完璧に行い災害が全く発生しないように努めるべきであるが、莫大なコストと時間がかかってしまうため現実的とは言えない。そこで、ソフト対策を併用することによって、いかに被害を減らせるかが重要である。

指導教員 曹 西 助教授